

## は し が き

センター長 江 口 修

97年は行政改革案策定の山場を迎え、大学をめぐっても独立エージェンシーを含めた組織のあり方の見直しについて大きく議論が盛り上がった。国立大学協会の要請と文部省の意向とがあいまった形で当面は現行形態を続けることになったが、厳しい自己改革が必要とされる状況が去ったわけではない。外国語教育をめぐっても、インターネットの加速度的な普及もあってか、英語の国際語としての地位がますます高くなる中で、文化の相対性に基盤を置く多言語主義というヒューマニズムだけでは、なぜ大学で専門科目としてではなく外国語を教育する必要があるのかを説明することは困難になりつつあるように思われる。言語コミュニケーションをめぐる探求の今一段の深化が求められている。

さて本センターのこの一年を振り返ってみると、主だった成果としては各種語学能力検定試験で学生の成績が着実に上がってきたことがあげられる。また、札幌—ミュンヘン姉妹都市記念ドイツ語暗唱大会で本学学生が1, 2位を占めたことも大きなニュースであった。全国レベルの同種大会での本学学生入賞のニュースが聞けるのもそう遠くないことかも知れない。逆に非常勤依存率の問題が大きくクローズアップされたことはわれわれにとっては驚きであった。本学が外国語教育に熱心に取り組んだ結果としての高依存率であったとわれわれは考えているが、大学全体の問題として問われた以上は改善へ向け最大限の努力をしなければならないであろう。しかし、外国語の教育効果を上げるためにはクラスサイズを考えなければならず、いっぽう広く学生に履修させることを前提にするならば選択必修をある程度前提にしなければならない。この両者が非常勤依存率を考えるとアンビバレントな要素として問題を大きくしてしまうのは今に始まったことではない。大胆な発想の転換も含め創意工夫が求められていると言えよう。

本センターの人事面での動きを報告しておきたい。まず平成9年10月1日付けをもって応用言語部門下村五三夫助教授が教授に昇進された。また村島健一郎教務職員の退職にともない渋谷敏文君が採用された。しかし一方で長年英語教育に熱心に携わられると同時に北方少数民族言語の研究で大いに成果を上げられてきた津曲敏郎教授が北海道大学文学部に平成10年4月1日付けでもって転出されることになった。われわれにとっては大きな痛手であるもののやはり喜ばしいことであり先生の今後のご研究の発展を祈念してお送り致したい。同様に本学外国人教師として17年もの長きにわたって勤められたマイケル・エドワード・カー先生がその漢字文化への造詣を乞われてやはり平成10年4月1日付けをもってハワイ大学に転出されることになった。「温厚篤実」をわれわれ日本人のだけよりも体現しておられた同教官には心より御礼申し上げたい。そして分かっていたこととはいえいざ迎えてみると本当にお名残惜しいのが同じく本学外国人教師ダイアン・カマラータ先生のご退官である。先生は最終講義に代えて「一人芝居」を上演された。テレビ俳優としても活躍された先生のさすがはプロとうならせる演技力もさることながら、先生が取りあげ演じられた十九世紀アメリカ社会の殻を破って生きざるをえなかったアメリカ女性が

二十世紀アメリカ社会の根本を一部支えていることを満場の聴衆にそのパフォーマンスでもってストレートに伝えられたことは見事と言う他はなかった。上演後、舞台挨拶を日本語でなさりながら、本学の女子学生優勢の現状と将来を考えられてのことであったのか、“Girls, be ambitious!”と女子学生たちにエールを送って締めくくられたことも大きく印象に残っている。

本センタースタッフの海外渡航も相変わらず盛んであった。遺漏なきことを祈りながら順に紹介しておく。平成9年3月20日から31日まで個別言語部門英語系津曲敏郎教授が「ツングース系少数民族ウデへの言語文化に関する実地調査」でロシア連邦沿海州クラスヌイヤールに出張された。同じく3月23日から30日までマイケル・エドワード・カー先生が「辞書学に関する国際会議」出席のため香港科技大学に出張された。6月18日より8月30日までダイアン・カマラータ先生が「第4回国際婦人演劇学会」出席と研究資料収集のためアイルランドガロウェイ大学およびアメリカ合衆国ニューヨーク州立大バッファロー校に出張および研修で渡航された。7月5日から8月17日まで個別言語部門フランス語系尾形弘人助教授が「フランス語教育担当教員のフランス派遣研修」に参加のためフランス、カーンおよびパリ等に出張された。7月9日から9月1日にかけて個別言語部門英語系の大島稔教授が科研費による「カムチャッカ半島民族芸能調査／コリヤクとアリュート」にかかわる現地調査でロシア連邦カムチャッカ半島ペジンスキー湾岸村落を調査された。引き続きようにして同教授は科研費による国際学術研究「環太平洋の危機に瀕した原住民言語にかんする緊急調査」の現地調査のため9月18日より10月2日までアメリカ合衆国、アンカレッジに出張された。応用言語部門下村助教授（出発当時）は共同調査および論文打ち合わせ等のためポーランド科学アカデミー芸術研究所とフィンランドカストレン協会に出張された。個別言語部門ロシア語系のスペヴァコフスキー助教授は研究資料調査収集のためアメリカ合衆国ハワイ大学に出張された。さらに個別言語部門ドイツ語系大塚讓教授はバイロイト大学等ドイツ語圏大学の視察ならびに世界ドイツ語教師会議参加等のためドイツ連邦共和国バイロイト、ビーレフェルト、ライプチヒ、ミュンヘン、オランダアムステルダム、オーストリアウィーンを回られた。個別言語部門中国語系萩原正樹助教授は在米漢籍の調査・資料収集のためアメリカ合衆国ノースカロライナ州立大学およびニューヨーク市メトロポリタン美術館に7月28日より8月6日にかけて出張された。11月26日より12月4日まで大塚讓教授が学生留学交換協定締結交渉のためドイツ連邦共和国バイロイト大に出張され、その後同校との学生交換協定が双方で正式に決定され平成10年度から実施の運びとなった。個別言語部門中国語系裴崢助教授は12月16日から12月31日まで第二外国語としての中国語・日本語教育研究に伴う資料収集等のためアメリカ合衆国各地の中国語学校および日本語学校を訪問された。平成9年最後の出張としてはカー先生が12月22日から平成10年1月17日までの辞書編集に関する会議出席および研究資料の調査収集のためアメリカ合衆国ハワイ大学に出張された。インターネットで研究者の距離が縮まったとはいえ、これほどの出張の増加振りは、やはり言語および教授法研究には現地調査が欠かせないことの証左であろう。

最後に本センターから出版の運びとなったものとして、朝克採録・著／津曲敏郎補訂・編『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』（97年8月）があることを付け加えておく。